

こどもと児童雑誌

— 児童読物の科学の確立のために —

高野桂一

まえがき

北海道のある学校で、雑誌のふるく、にのつていた理科実験をやったところ、大爆発が起って、重傷者を出したとか……。絵物語の力道山ヒロイズムを地でいって死に至らしめたとか……。二、三の表だった事件がきっかけになって、一時、悪書追放運動の花々しい時があった。

あの花々しさにひきくらべて、この問題に対する世論は、今やたるみ加減な感じがしないでもない。その後、運動自体の中からも色々な反省がなされた。この問題が悪書追放というだけの簡単なものではないことがわかり、長期運動体制に入ったからなのだろうか。

悪書の追放とこどもへの禁令とだけでは、エアポケットが生み出されるだけだったことは、いうまでもなからう。量・質ともに

悪書に対決するだけの身代りをどうするかという問題こそ、大事なことだった。

元々、この問題解決は、一時的な運動にのみ期待できる筋合のものではなかった。明確な根拠と手続きが準備され、長い眼でじっくりと取組まねなければならぬ問題だったといえる。その証拠には、グロだとかどぎつ、とか叫んでいるが、いったい、悪書とは何ものかということになると、具体的には、ずいぶん疑問もでてきたのである。そして、運動を唱える人々たちが、どれだけ具体物を検討しているのかにも、案外頼りないものがあったといえないか。きめて、(科学的根拠)は、あいまいだったようだ。もちろん、悪書ということを極点において問題にするということ、さきの運動が何ほどの貢献をしたであろうことは、否めない。

しかし、現実の具体物には、その両極のいずれにも片づけられない中間物が余りにも多かった。良悪の価値判断でのみケリをつ

けるには、現実には余りにも複雑だった。

また、たまたま社会の問題になった二、三の事件にしても、それが果して読物だけの影響から促されたものだったかどうか、テレビ、映画、ラジオ、大人の雑誌などの影響から、それをどう識別できたであろうか。その方法もあいまいといわざるを得ない。

とにかく、悪書追放のエネルギーの相当な割合のものが、良書や適書を創り出していく面にふり向けられねばならないだろう。

そのためには、こどもの読物をめぐる基本的・総合的・体系的な研究が、いっそう必要だといえる。

それは、もちろん、読物選択や読書指導の領域で解決する部分も大いにあるであろう。しかし、何といても現実の急務は「創る」段階からその「効果」を確める一連の段階を一貫した児童読物研究が、あらゆる研究分野の協力によって、体系や脈絡や方法論を整備せねばならないことになる。そしてまた、現在の段階では、すべての研究が、この「創る」内容の向上に強くハネ返ってこなければならぬということである。

そうでなければ、「いいものだといっても、こどもが読みたがらなくてはどうにもならない」という当然すぎる言分が、商業主義の低俗性の是認に、ますますすりかえられる悪循環を断ち切る事ができないからである。

本稿は、そのような意味で、こどもに大きな影響を与えていると考えられる児童雑誌を取上げ、何らかの科学的な方向に寄与できればと思つてものした、苦しまぎれの産物にすぎない。お役にたてば幸である。

一 こども社会の読書体制

こどもたちは、⁽¹⁾一体どのような場で、どのような仕方⁽¹⁾で読書をしているであろうか。まず、許される範囲で、それにふれておこう。

● 読書のルート

こどもたちは、どんなルートを通して本を手に入れているであろうか。昭和三〇年九月毎日新聞が全国の小・中学生四六七六名を対象にした調査によると、⁽²⁾小・中を通じ、最も多かったのは、「友だちに借りて読む」ということであった。これは、小学六年生全体の五七%、中学二年生の六二%で、総体で約五五%となっている。

次は、「学校図書館で読む」が全体の約五〇%で、「学校図書館以外で読む」ものは、わずか小学生が九%、中学生が一〇%であった。「家の人を買ってもらって」は、小学生全学年を通じ、四三〜三八%で、中学生は三六〜二九%となり、上級学生ほど減少。逆に、「自分で買って」は中学生が一八〜二五%、小学生一三%前後となつて、上級学年ほど多くなる。生活の自律性要求の度合が反映されている。

「借本屋で借りて」は、小四の男一四・八%、中一男一五・八%と最高を示し、小六で一・四%、中三で一二・八%と上級ほど減少している。「本屋で立ち読みする」のは、小四の男が最高で九%を示している。

以上のことは、一言にしていえば、こども社会の読書が、いか

に多く友人間の交渉過程において成立しているかを物語るものといえる。また、貸本屋で借りて読むものや店頭立ち読みのものであっても含めて考えるとき、子どもたちが、いかに多く学校や家庭の指導場面の外に読書のチャンスを求めようとしているかを推定することができる。

このようなことは、都市における子どもの漫画入手の方法にみると、ますます明白になる。⁽³⁾ 第1表によれば、「友だちから借り

第1表 漫画の入手方法 (%)—都市

種別 学年	家で買ってもらう	自分の貯金で買う	友だちから借り	学級文庫や図書館から借り	貸本屋から借り
	%	%	%	%	%
小3	18	14	16	22	30
"4	22	12	38	5	23
"5	18	9	46	11	16
"6	21	7	48	10	14

る漫画の量がいかに多いかが知られよう。それは、学年の進むにつれて増大している。貸本屋から借りる量も、馬鹿にはならない。

漫画は子どもたちの間では、「通貨の一種として作用している。」「自分で漫画本をもつということは、友だちから借りるための必要条件」になっていくわけである。

そのことは、第2表の農村のこどもの場合にもほぼ同様にいえる。ただ、農村のこどもたちは、都市のこどもたちと違い、貸本屋はもちろんのこと、本屋もない場合が多いから、自分で買ったり、貸本屋から借りるといような自由選択の領域は自ら狭められる。

親や教師の眼が届かない問題生起の温床は、より多く都会のこどもたちに与えられているといえよう。

第2表 漫画の入手方法 (%)—農村

種別 学年	もらう	自分で買う	友だちから借り	学級文庫や学校図書館から借り	他からもらう
	%	%	%	%	%
3	34	4	23	35	4
4	31	0	38	31	0
5	16	6	33	40	5
6	12	2	37	44	5

第3表 漫画のソース

種別 地域	単行本	雑誌	新聞
	都会のこども	25%	45%
農村のこども	50	40	10

注 この単行本の中には、雑誌のふろくとしての漫画単行本がふくまれているようである。

ところで、このような漫画の大部分が児童雑誌あるいはそのふろくを通してであることは、第3表からもおよそ推量できる。値段が低廉で、絵物語と漫画でその内容の大部分を占め、単行本に比べて発行部数のはるかに大きな児童雑誌やそのふろくが、また、こどもの「通貨」の先端に位することは背けることである。

●貸本屋とこども

こどもの読書にとって「陽の当らぬ場所」の一つに数えられているものに、貸本屋がある。さきほどの毎日新聞の調査でも、こどもが貸本屋から借りる量は案外馬鹿にならないことがわかる。

東京都青少年出版物対策協議会の貸本屋調査によれば、⁽⁴⁾ 都内には約三、五〇〇もの貸本屋があるという。蔵書約二、〇〇〇冊程度

の中位の貸本屋の児童向図書一、〇二九冊の内容をみると、漫画が七三%、小説二〇%、伝記四〇%で学習参考書は一冊もないという状態。利用者の内訳は、小学生が約四〇%、中学生以上三五%、成人二五%、というふうには、七五%までが青少年の占めるところとなっている。貸本屋は、こどもたちを読者としてねらい、こどもたちのためにあるという面さえあるのではないか。

実際に、借りられている本の内容をみると、漫画↓小説↓雑誌↓伝記↓童話の順を示している。

また、毎日新聞の調査⁽⁵⁾では、自分の図書をもつことの少ない農村のこどもたちなども含まれる関係上、平均して比較的上位の読書源であった学校図書館も、貸本屋のある学区の学校図書館では憐れな存在でしかない。同一期間内の学校図書館における月こども一人当りの貸出が平均〇・三冊であるに対し、近所の貸本屋ではなんと月こども一人当り二・五冊も貸出している。こども⇨貸本屋⇨漫画・雑誌という一連のつながりは、都会のこどもの読書生活をつかむ一つの手がかりであることがわかる。

●店頭の立読み

家でも、学校図書館でも、時によっては、友人間でも満されな場合の吐け口は、遂に店頭の立読みに求められる。

都立教育研究所が行った八〇人のこどもの立読み観察から、その横顔をのぞいてみよう。⁽⁶⁾

第4表にみるように、これは「一人で読んでいる」ものや「友だちと一緒に」のものが圧倒的。「黙って」、「真剣そうに夢中で」読んでいるものが大多数を占める。立読みをめぐる人間関係は、

第4表 店頭立読みプロフィール

	読書のすがた	人数
人間関係	友だちと一緒に	27
	父兄と一緒に	2
	ひとりで	38
	その他および無記	13
態度	話しながら	8
	だまって	61
	その他および無記	11
表情	笑って	14
	真剣に夢中になっ	37
	うれしそうに	9
	その他および無記	20

が自らを解放するオアシスだといえることができる。

それはまた、おとなが考えるように、生活や学習の本流からはずれた怠惰な娯楽のむさぼりというには、あまりにもかわいそうな姿だといえないだろうか。思う存分羽ばたける広場をもたない都会のこども。「一八才未満お断り」という看板を掲げねばならないほど、ひとりよがりにおとなの世界からゆがめられ、せばめられた娯楽の場。一体、こどもたちが本当にアミューズできる場は、どこにどれだけあるだろうか。「勉強をしない」と叱る前に、本当の意味で学習をしたくなるようなエネルギーを生み出す生命の解放が、足りないのではないか。

さて、そのようなことは、第5表学年別立読み状況にも見るとおり、生活の自律性の萌芽の時代について、特に重要であるように考えられる。小学校三、四年から中学一、二年ぐらいまでにかけて、立読みは盛んにおこなわれる。毎日新聞の調査でも、これ

明らかに
おとなた
ちからの
逃避であ
り、家庭
と学校の
中間地帯
にあっ
て、都会
のこども

第5表 学年別立読み状況 (人数)

学年	小1, 2年 ぐらい	小3, 4年 ぐらい	小5, 6年 ぐらい	中1, 2年 ぐらい	中3, 高1, 2年ぐらい	計
人数	6	17	26	21	10	80

が、漫画、冒険、探偵もの、グラビアなどである。多くのおとなたちが、危険だとか、無駄だとかいってこどもに禁じようとしている内容の大部分が、この陽の当らぬ場所で見られてしまっていることになる。
● 家庭における読書生活——指導体制との関連で

について小学校四年生が最も高率を示し、男子の冒険へのあこがれと女子のオセンチへの芽生えの時期に連っているようにみえる。裏を返せば、この生活自律への欲求は、父兄や教師の手から解放されたいという心理の表われである。一般に、商業主義の力こぶを入れるのも、これらの年代を対象にしたものたともいわれている。

ところで、こどもたちは、そこで何を読んでいるであろうか。予想にたがわず、三、四年から五、六年ぐらいのものを読んでいるものの大部分は、漫画王、冒険王、少女、少女クラブ、おもしろブック、ぼくらといったような雑誌もの。中学一・二年になると、平凡ベイスボール・マガジン、少女クラブ、スポーツ・ニュースなどの雑誌。三年にもなると、いささか受験気分も手つだつてか、中学時代、中学コース、中学歴史といった受験雑誌などの類。

また、その内容をみると、約七三%のものが、漫画、冒険、探偵もの、グラビアなどである。多くのおとなたちが、危険だとか、無駄だとかいってこどもに禁じようとしている内容の大部分が、この陽の当らぬ場所で見られてしまっていることになる。

第7表 こどもの家庭読書の場所

場所	人数と%		%	
	人数		男	女
自分の部屋	196	148	70.4	71.5
茶の間	62	50	22.2	24.1
電車の中	4	2	1.4	1.0
停留所	—	—	—	—
教室	3	1	1.0	0.5
図書室	—	—	—	—
その他	14	6	5.0	2.9
計	279	207	100.0	100.0

注 長崎大付中1, 2, 3年生を対象とした調査より改作

平均の読書時間は、中学生

第6表 こどもの家庭読書の時刻

とき	人数と%		%	
	人数		男	女
朝	3	2	1.7	0.9
家へ帰る	43	36	15.4	17.3
夕飯後	161	101	58.2	48.6
夜の	43	43	15.4	20.7
その他	26	26	9.3	12.5
計	276	208	100.0	100.0

注 長崎大付中1, 2, 3年生を対象とした調査より改作。

読む場所はいえ、第7表に示すように、自分の部屋(これは付属中の特殊性もあると考えらる)が多い。特に中学生にもなれば、家のものからは一応隔離されて本を読むことが普通だし、またそうしたわけだ。

また、一日

以上のような読書の傾向は、また家庭における読書生活のあり方も無縁ではないはずだ。こどもは、一日の中でいつごろ本を読むだろうか。長崎大付中(7)の調査によれば、第6表のように、夕飯後と夜中に読むものが大部分を占める。

第9表 なんのために本を読むのか

理由	人数と%		人数		%	
	男	女	男	女	男	女
おもしろいから	115	69	31.7	22.7		
たのしいから	126	132	34.7	43.4		
勉強ができるようになるから	36	28	9.9	9.2		
立派な人になれるから	10	23	2.7	7.6		
その他	76	52	21.0	17.1		

注 長崎大付中1, 2, 3年生を対象とした調査より改作

第10表 読書をとめられたり、注意されたりする理由

理由	人数	%
学校の勉強のほうがかためられるからといわれる	93	24.4
本を読むひまがあったら手伝いなさいといわれる	17	4.5
その本は中学生の読む本ではないといわれる	51	13.4
もっとためになる本を読みなさいといわれる	89	23.5
あかるところできちんとして読みなさいといわれる	130	34.2
計	380	100.0

第11表 こどもの本にどの程度目を通しているか

程度	人数	%
たいていやっている	99	29.2
時々やっている	194	57.0
ほとんどやっていない	47	13.8
計	340	100.0

第8表 家庭における読書時間

読書時間	男	女
全然よまない	—	—
10分ぐらい	2.1	0.1
30分ぐらい	37.0	45.0
1時間ぐらい	61.0	53.0
その他	—	2.0

注 長崎大付中1, 2, 3年生を対象とした調査より改作

入り込まずにはいない。父母をはじめ家族の干渉や指導がいや応なしに付属中の家庭などは、多かれ少なかれ教

で一時間から三〇分ぐらいのところが多い(第8表)。これらの時間は、「楽しから」、「おもしろいから」、「こそ読書という形で過されるわけである。(第9表参照) ところが、そこには

育意識が過剰になっているのが常で、さきの読書時間などは、こどもたちに許された最少限の読書によるリクリエーションの時間なのかもしれない。なぜならば、こどもは、家庭にあっては、第10表にも示すように、つい「学校の勉強のほうがかためられる」といわれたり、「もっとためになる本を読みなさい」といわれることが多いのだから。それには、教育的に注意深くいわれる場合から、学習用以外の本を見ていさえすれば文句なしに注意されるようないろいろな段階が含まれていよう。しかし、それがどれだけ本の内容に則して、具体的に親切になされているであろうか。毎日新聞が、こどもに、父兄がこどもの読む本や雑誌を見ることがあるかを訊ねたところ、「ときどき見る」ものが七〇〜七五

第12表 こどもは大人の雑誌を読むか

項目	読む	絵や漫画 をみる	読まない	読ませない	不答
頻数	13	157	94	12	45

第13表 生徒の所持する本の平均冊数

種別	学年			
	1年	2年	3年	計(平均)
学習参考書	7.8	8.5	11.3	7.2
辞典	2.7	3.8	4.0	3.5
単行本	18.5	27.6	31.0	26.0
雑誌	52.3	74.0	48.0	87.0

下層のこどもの家庭読書環境の貧弱さは、結局は、その背景をなすおとなの隣れた大衆雑誌的環境と同一のものであり、縮図であることは想像できる。だからこそ下町における貸本屋とこどもは切り離せないことになるのである。また、こどもは知らぬ間に、案外、おとなの雑誌

で、全く見ない無関心型が一割余りに及んでいる。それは、長崎大付中の場合でさえ、十分におこなわれていないことがわかる。^(第11表参照) 全くの無関心や、内容をあまり見もしないで、警察的態度にでる親は、案外多いのかもしれないその役割の大半を担っているのは母親であるが^{(「読むのを止めたり注」意する)四五・七%}、それがどうしても推奨する場合(三八・二%)より禁止に傾きがちである。親の目を盗むこどもの態度の醸生も、決してこれと無関係ではない。ところで、家庭の読書条件は、そのこどもや家庭のおかれた地域の社会的条件や文化水準などによって、ちがいがあると考えられる。読書の社会階層性は、単にその読物の内容に示す興味や違いに表われる以前に、既にその条件に表われている。⁽⁹⁾ 下町の

誌などから視覚的な娯楽を得ていることが察せられる⁽¹⁰⁾。下町のこどもが、真にこども向けのものでも楽しめない貧弱さが、こんなところにもはみ出すとしたら放っておけない。そして最後に、現在のおとなの読書が大衆・週間雑誌的環境におかれていると同様、こどものそれも例外でないことをあげておこう。第13表に示すように、付属中学生の図書所持状況にもそれがうかがわれるが、特に貧困な家庭のこども大衆が、いかに雑誌文化、漫画文化の中におかれているかも察せられる。これはまた、毎月七〇〇万部近く出される児童雑誌の販売体制にも、自ら関係することである。⁽¹¹⁾

- (1) こどもという対象の限定を児童読物に対応させて考えると、色々むずかしいことになるが、ここでは中学生程度のものもふくめて広く解したい。
- (2) 毎日新聞小・中学生の読書調査、昭和三二年九月五日。
- (3) 読書科学 一九五七、二、P三二。
- (4) 青少年出版物江戸川地区対策協議会の調査—日本教育新聞昭和三二年三月二二日。
- (5) ここでは、調査対象の一々の違いはあまり影響しないものとみて。
- (6) 都立教育研究所研究部、高野調査。文部省 初等教育資料一九五六年二月拙稿参照。
- (7) 長崎大学学芸学部付属中学研究シリーズ、一九五五年二月

(8) 同前、表略。

(9) 青少年出版物対策協議会報告書 一九五七年、P二五—

六および読書科学 一九五七年一月の平沢教授の論文。ここでは主として読書興味における階層性を扱っている。

(10) 東京都教育委員会 青少年委員研究調査集録 昭和三年P五九。

(11) 昭和三二年四月二一日毎日新聞によれば、毎月の児童雑誌発行部数は、六二三万九千冊といわれている。

二 児童雑誌についての世論

● 調査の意味と方法

児童雑誌が低俗だとか、どぎついとかよくいわれる。しかし、ジャーナリズム即世論というわけにはいかない。ジャーナリズムは、「問題らしい」ということを「問題」にするだけに終ることが、しばしばであるからだ。

そして、大衆もまた、その程度の浅い「問題分析」の層に止まってしまうことが多い。

児童雑誌の俗悪性の問題もこれと同じことがいえよう。

どのような素材や内容を、どのような視点からみたときに、どのような問題があるというのだろうか。世論の姿そのものを、できるだけ科学的、具体的、内容的に再確認しておくことは大切である。それはまた、問題のありかを明白に把む手だてでもある。

まず、児童雑誌の内容と表現について、新聞、ラジオ、その他で取沙汰されている、俗悪、非合理、封建的、どぎついなどとい

うことは、どれだけ世論の全貌を物語るものなのか。それを世論調査のいくつかの仮設として整理してみた。被調査者に渡すための雑誌二七種(一般に俗悪といわれるもの二、三はぬけ)については、あらかじめ発達段階にしたがって幼稚園、小学校低・中・高学年グループに四分した。そして、一人当り約七種のを比較研究してもらうことにした。

被調査者は、有識者、教師(幼・小・中)父兄、その他(青年官庁、団体関係者)の四社会層に分類、八三名が選出された。

● 結果の概略

さて、このような方法で確かめてみると、常日ごろ、われわれが叫び、かつ聞いていることが明白になったと同時に、それがいかに雑なもので、根拠の乏しいことが多いかが明らかにされた。

内容の俗悪性や色彩のどぎつさなどについて指摘されたいくつかのものは、確かに世論とされるものの一面を形づくっていたがそれがすべてではないという感を深くした。

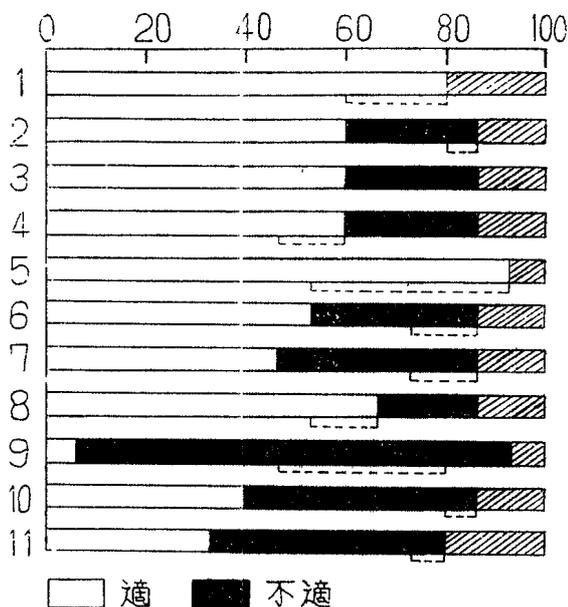
とくにこの調査のねらいが、俗悪なものだけを選び指摘させることだけに焦点づけられないで、現実の材料の中からも「価値高いもの」、「こどもに妥当なもの」を見出してもらおうという広い視野に立ったせいもあるう。

とにかく、実際に、現実のものの中には、良悪の価値判断だけではきめつけられない中間物がいかに多いかを思い知らされた。

また、それを決める基準も、案外あいまいなことが見られた。

ところで、具体的な二、三例にふれてみよう。(I)⁽¹⁾ 一般に最も騒がれている漫画、絵物語についてであるが、たとえば、低学年雑誌

第1図 漫画の内容および動物擬人化の適不適 (D・低学年雑誌グループ)



1. いたずらたぬき (1年の学習) 2. どなるどのペンキ [や(一年の学習) 3. レンズのぼうや(二年の学習) 4. ごくうちゃん(二年の学習) 5. さんきちものがたり (小学一年生) 6. くま (小学一年生) 7. じろちゃんのおつかい (小学二年生) 8. ふしぎなうわさ (小学二年生) 9. 海底人間メバル(ぼくら) 10. インデアン, マキ(幼年クラブ) 11. フランクリン物語(幼年ブック)

グループにててくる漫画「海底人間メバル」について九〇%のものが好ましくないとしている(第1図参照)。
これは、海底に住む「海底人間」なるものが、陸地を海底に沈め、わがものにしようとして挑戦するとき、ただひとりメバルだけが陸上の人間に同情、仲間を裏切って義侠心を発揮するという架空もの。

- これが不適当とされる理由は、次のようなことにある。
- 1 荒唐無稽、現実的な町が海底に沈むなどこどもに恐怖を与える。
 - 2 不明確な叙述。
 - 3 架空的で誇張が多い。
 - 4 あまりにもくだらない空想で、こどもの怪好奇心はそられて

いる。
5 すぢがむずかしい。
6 怪奇的。
7 絵がどぎつい。
8 雑然としている。
9 あまりにもでたらめなものすごさ。
絵物語で、怪物天馬なるものと斗う少年小太郎の武勇伝「流星童子」の説明語や絵の描き方に対する次の批判も、その類のものである。

- 1 グロテスクすぎる。
- 2 おおかみのばああ描き方、字、絵ともどぎつい。
- 3 恐しい面が強調されすぎている。
- 4 非現実的。

5 霊的な感じがするという以上に、どぎつい場面の絵や文の描写は、空想の世界をのりこえて恐怖を与えるのみ。
6 恐しいおおかみばああのようなもので、こどもの興味をひくのは古い。
7 ただスリルを追うだけで、あまりにも刺激的。

この世論と二つの作品とをひきくらべてみて、確かにそのような要素を認めはするが、しかし、このような理由の中にも考え方によっては、もう少しきめ細かく、慎重に述べて欲しいという点もある。また、表にも見るとおり、そのようなものがすべてではないし、どちらともきめかねるもの、否、現実の中にも「さんきちものがたり」のように、多くのものが好ましく思う漫画もある

ことを忘れてはならない。

その批判の根拠は、次のようなこととされる。

- 1 明快である。
- 2 印刷がきれい。
- 3 登場する動物の描き方に人間性がある。
- 4 きつねやくまの擬人化が素直である。
- 5 いつも、ずるいとかわるいとされている動物の姿がよく現れている。
- 6 動物擬人化にぎこちなさがなく、とけいつている。
- 7 色彩がよく、表情がよくでている。
- 8 人物動物もやさしい心が描かれ、親しみやすい。

ここでは、少なくともおとなたちの心の底には、漫画の内容の自然的で素直な技法、明るさ、優しさほおえましさ、おもしろさ特徴的なこと、動きの明白なことなどが、批判の基準となって潜在しているとみられる。

きわだった二、三のものに対する局所的な見方を、全体的な批判にすりかえてしまうことは、十分警戒せねばならないであろう。なお、高学年対象の物語について、不適当なものとして「海底の魔術師（少年）」、「恐怖の紅ばら（少女ブック）」など、適当なものとして「雪晴れの朝（小学六年生）」、「太陽の子（少年）」などがあげられているが、これらの批判の視点（理由）をあげておくとしよう。

ところで、この世論分析からみられることは、一般に無難な内容とされるものの多くが、学習誌の中にあり、娯楽誌は比較的う

（物語を適当とする理由）

分類	指摘数	具 体 例
現実性	6	現実から離れていない 子どもになっとくできる事実 まじめな作品
社会性	4	平等の精神を強調している 社会批判が含まれている 世の中をどこまでも正しく歩む姿を表わしている 先生の誠実な態度がよい
ヒューマニズム	3	少年らしいヒューマニズムがある 人の心の美しさを表現している 友情を扱っている
教育性	3	愛の気持が養われる プライドを持つ気持を起させる 責任感を植えつける
盛り上り	2	感動的である 迫力がある
表現	2	文章がよみやすく、いやみがない 表現が明るい
挿 絵	2	さし絵が美しい 写真がよい
その他	2	上品なユーモアがある 原作がよい

けがわるいということである。しかしこのことは、だから学習誌さえ与えておけばいいということにはならない。このようなおとなの価値観が、すぐにこどもに受け入れられるかどうかは別問題である。

むしろ、現状では真の意味の娯楽誌こそ与えられなければならない

ないのではないか。

(注)

(1) 児童読物調査

研究会編、児童

読物の研究 [I] 拙

稿参照

(2) 読書科学一九

五七年二月波多

野氏の調査では

今のこどもが漫

画をおもな読物

としている割合

は、都会のこど

もの約七〇%、

農村のこどもの

約八〇%だとい

われている。

なお、漫画、絵

物語などの外に

も、表紙、スペースの配分、さし絵の構想や描写法、指導の

ための配慮などについて世論を分析したがここでは略す。

三 おとなの読物観とこどもの好み

前節の世論分析でふれたようなおとなの見方、考え方が、その

(物語を不適當とする理由)

分類	指数	具 体 例
非現実性	6	現実離れしている 架空的である
俗なメロ ドラマ性	5	常套的な俗なメロドラマ 少女的な感傷をそのかす健全さがある 安易な夢を追う少女の心を刺激して浮薄な人間を作 る 軽々と家出などを扱っている 古くさい話
刺激性	4	刺激が強すぎる 恐怖心を起させる 二挺拳銃で暴れたがる
不健全性	3	健全である 健全な想像ができない 信頼感を無視し、矛盾と虚偽に満ちている

まま直ちにこどもの要求に適合するか、どうかは疑問がある。

われわれは、案外こどもというものを決めてかかっているところがないだろうか。いま、ここに両者に同一の素材を同一の視点から見てもらった二つの結果を対応させてみよう。⁽¹⁾

●読ませたくない物語で、読みたがる物語

おとなが読ませたくないとする物語を、こどもはどう見ているだろうか。三、四年生についてみると、各学年それぞれ一〇テーマのうち特徴ある反応を示したものは、第14表、第15表のとおりである。

まず、三年生については、「なぞの金時計」をおとなが読ませたくないものとしているのに、こどもは逆に好きだから読みたいとするもののほうが多い。

この内容は、少女探偵を主人公にした探偵物語である。探偵ケイ子が、「片目の毒蛇」といわれる賊の着ていたマントを取るために、でかけたがライオンのおりに入れられてしまう。

やっと飛び出して自動車に乗ると、片眼の運転手に眼つぶしをくわされ、自動車から放り出される。これを探偵の東京紳士が救いあげて、その顛末をきく。ふと、ポケットに手を入れると、まっ赤なへびが出てくる。

ケイ子は、片眼の賊をつかまえろ決死の覚悟をする。賊の着ていたマントには、金時計が九つも入っていた。略々、こんな筋の内容を黒すみ一色刷りのさし絵とともに打出したものである。

おとなはこれについて、「不健全な内容」、「こどもの発達程度を越えている」、「さし絵がグロテスクで恐怖を呼ぶ」とかいうの

第14表 物語についてこどもの好き・嫌いとおとなの適・不適の
対応 三年生

誌名と題名	好き (適)	嫌い (不適)	不明
1. なぞの金時計(なかよし)△	39(1)	18(10)	0(3)
2. 鋼鉄魔人(おもしろブック)△	37(7)*	29(9)*	0(4)
3. なぞの紅ばら荘(少女)△	35(3)	26(7)	0(4)
4. こてんぐからすまる(小学三年生)△	51(1)	20(6)	0(7)
5. チロと雪(三年学習)○	34(9)	25(2)	0(3)
6. うさぎがり(小学三年生)○	38(11)	20(0)	0(3)
7. アラヂンのランプ(三年の学習)○	53(10)	16(0)	0(4)
8. かしこい動物物語(小学三年生)○	51(12)	6(0)	0(2)
9. 銀星乙団(おもしろブック)○	21(17)	33(4)	0(18)
10. 少年王者(同上)○	53(5)	24(4)	0(5)

注 ○内は、同一テーマについておとなか適・不適とする数。その比と好・嫌の比を対応してもらいたい。

- ※は、おとなの数は決定的ではないが、テーマの中で最上級として選ばせたときは、最も不適とされたもの。
- △はおとなが好ましくないとするもの、○は好ましいとするもの。

だが、こどもは、やはりこのスリル感がいいのであろう。特に、これが女子には賛否相半しているのに、男子では二六票中「嫌い」とするものはただの一票であることからして、男子の冒険性がうかがえる(男女別表略)。

どちらかというと、少女向けにできているこの雑誌のこの探偵物語は、看板どおりにもし女子だけが読むとしたら、問題がありそうだ。この年代の女子が「夢をみそうでこわい」という理由を相当に述べている。女子だけのことを考えた場合には、過剰な恐怖を排除するという意味で、おとなの方に軍配があがるようにおもうが、全体的にみたときには、そう一がいには決められない。⁽²⁾
「なぞの紅ばら荘(少女)」、「こてんぐからすまる(小学三年生)」などもこの類のものである。

全般的にみていえることには、おとなの読ませたくないとするもののほとんどは、娯楽雑誌の中にあるようにおもわれる。ところがこどもが読みたがる票の集中度は、一般にこの娯楽誌に高いようにみえる。

しかし、ここではどこまで、この範囲の個々の内容を独立にみていった限りのことであることを断っておこう。

●読ませたい物語で、読みたがらない物語

第15表に示すように、四年生の場合、おとなは読ませたいとおもうがこどもが読みたがらないものに、「ゆきおんな(四年の学習)」がある。この点、男女とも同様である。なぜなのであろうか。

これは、ラフカディオ・ハーン作の日本伝説をダイジェストしたものの。己の吉と茂作という木こりが、森から帰る途中猛吹雪に会って倒れていると、雪女がでてきて息を吹きかけて茂作を殺してしまふ。己の吉だけはこの話を他言しないことを約束に助けてもらふ。

第15表 物語についてのこどもの好き・嫌いとおとなの適・不適の対応 四年生

誌名と題名	好き (適)	嫌い (不適)	不明
1. なぞの紅ばら荘(少女)△	23(8)	8(8)	18(4)
2. 銀星乙団(おもしろブック)△	17(3)	4(7)	18(4)
3. 太陽行進曲(")△	23(1)	7(7)	0(6)
4. にじのかなたに(小学四年生)	18(3)	10(7)	0(4)
5. ゆきおんな(四年の学習)○	9(10)	26(1)	0(3)
6. ウィーンの少年音楽隊 (小学四年生)○	9(11)	18(0)	0(3)
7. ぼらかおる朝(四年の学習)○	15(11)	14(0)	0(3)
8. なだれ(小学四年生)○	14(9)	15(1)	0(4)
9. こわれたオルゴール(四年の学習)○	23(9)	8(3)	0(2)
10. 少年王者(おもしろブック)	29(5)	2(4)	0(5)

注 第14表に同じ。

う筋。四場面の青インク一色刷りのさし絵つき、なかでも雪女が茂作に白い息を吹きかけているところ、森の雪の中に消えていくところは、恐怖をそそる山になつている。これに対しこどもは「読むと夢をみるからいや」、「こわいから」、「うすき

そのうち、己の吉は大川の渡しで知り合ったお雪という美女と結婚し、子どもまでもうける。ある晩、妻が暗どんのそばで縫いものをしていた姿があまりにも雪女に似ているので、思出話を語ろうとすると、それが実は雪女で急にその姿が消えてしまふとい

み悪いから」、「いやな気がする」といって恐怖の中に追こまれている。このような理由を述べているのは、大体、読書力段階「四」〜「五」の優秀なものに属する。ところが、読書力のいちばん低い「二」〜「一」のものは、この話がつまらないものであったり、「なんだかよくわからない」ものらしい。そういえば、ラフカディオ・ハーンの文をダイジェストしたこのものは、おとなの立場からは、文学的価値が高いのかもしれないが、この劣等なこどもには、一般にピンとこないのであらう。この物語は、優秀児だけをねらって出された感がないでもない。それもそうであるが、こどもの訴えるさきのような恐怖感に対して、おとなは、それがハーンの作であるがゆえに、案外手ばなしでいられるらしい。各作ものといえれば安心するたあいなさには、少し反省が欲しいようだ。「ウィーンの少年音楽隊(小学四年生)」も同様の傾向をもっている。トピカルなウィーン少年合唱団の来訪をきっかけに、その写真集をストーリー化した程度のもものでは、こどもの気持は、「つまらない」の一語につきているようだ。●読ませたい物語で、読みたがる物語 読ませたくて、しかも読みたがってくれるもの。実は、それが理想的なもののだが、第14表にみるとおり、三年の場合、まず、「アラチンのランプ(三年の学習)」、「かしい動物物語(小学三年生)」などがあげられる。「アラチンのランプ」は、いわゆるアラビアンナイトのダイヂ

エストで、多色刷りのさし絵つき。右側に文、左側にさし絵という形で打出されている。

こどもはこれを「おもしろい」という。「文がわかりやすい」ということが、そのおもしろ味をいっそう発見させる契機になっているようだ。

「かしいどうぶつものがたり」のほうは、音をきき分けるかしい犬とか、ビーバーのダム作りというように珍しい動物の生活を知らせようという多分に説明的文章。こどもがこれを「おもしろい」という理由は、その主題や取材の珍しさにあるのだろう。

さし絵は黒一色の写実的なものにすぎないし、ここは特別ひかれているとはおもえない。

ところで、ここではおとなは、「アラジンのランプ」が名作であること、「かしいどうぶつものがたり」が理科学習ものであるために信頼し、安心したのである。往々にして、そのようなものは、こどもに味気ないものとして捨て去られることが多いにもかかわらず、そのダイジェストの仕方が、こどもの要求にもマッチし得たことは、一応の喜びとしていいとおもう。

以上のほか、読ませたくない物語で、読みたがらないような、最も好ましくないような物語。あるいはまた、そのようなことを、さし絵、漫画、絵物語などについて、全学年にわたって、あげなければならぬが、紙数のつごうで割愛する。

おとなの意見にくみすべきか、こどもの主張に軍配をあげるべきかは、素材の具体性に則して、また、両者の根拠とする点を考

慮して十分検討せねばならないむずかしさをもつ。しかし、これでもいいものを創り出すための一つの見方であり、方法であると考えられる。

(注)

(1) 児童読物研究会編「児童読物の研究Ⅱ—こどもと児童雑誌—」拙稿参照。

(2) 方法的に、一つの素材についておとなの場合にもときにより、「男にとっては、女の子にとっては……」という質問をすべきだったかもしれない。一般的に、おとなの批評眼がそこまで分析的である場合にかぎって。

四 児童雑誌の現状と問題—その内容分析の概観

今までに述べてきたことの反省からも、われわれは、まだまだ、児童雑誌を見る眼、いかえれば、その内容分析の基準や方法論を確立しなければならぬ段階にあるといえる。

ここにあげる分析の結果も、まことに不備な一試論にすぎないが、現実の雑誌の内容の性格や傾向を語るよすがになれば幸である。

●その統計的考察

まず、児童雑誌の内容傾向の分析法として、A内容への配慮の分析、B表現への配慮の分析、C形式への配慮の分析の三つに分けてみることにした。⁽¹⁾最近の雑誌三五種をとりあげその量的傾向の考察から入ってみよう。

(1) 版の大きさの傾向

第16表 各誌の形式的配慮の一覧表

グループ	誌名	価格	版の大きさ	紙質*	刷り*	装幀*	ページ数	ふろくの点数
A	幼稚園こく	100	B5	5	4	3	50	5
	幼稚園ブック	100	B5	5	5	4	27*	4
	幼稚園の新しい	110	B5	5	5	3	50	5
	幼稚園の新しい	100	B5	5	5	5	46	5
	平均	102.5	B5	5	4.7	3.7	43.3	4.8
B	一年生の学習	70	A5	4	3	3	114	1
	二年生の学習	70	A5	4	2	3	126	1
	三年生の学習	100	B5	3	4	4	104	6
	四年生の学習	110	B5	3	4	3	142	7
	五年生の学習	100	B5	4	4	5	88	6
	六年生の学習	100	B5	3.5	4	5	112	6
	平均	91.7	B5	3.6	3.5	4.5	114.3	4.5
C	三年生の学習	70	A5	1	3	3	194	1
	四年生の学習	80	A5	1	3	3	222	1
	五年生の学習	110	B5	1	3	3	206	3
	六年生の学習	115	A5	1	3	3	296	4
	三年生の学習	110	B5	1	3	4	172	5
	四年生の学習	110	B5	1	2	2	188	7
	五年生の学習	110	B5	1	2	3	180	5
	六年生の学習	110	B5	1	3	3	198	6
	三年生の学習	100	B5	1	2	3	176	6
	四年生の学習	110	B5	1	2	3	202	5
	五年生の学習	120	B5	2	3	3	198	3
	六年生の学習	100	B5	1	2	2	198	3
	平均	102.3	B5	1.1	2.6	2.9	202.9	4.2
D	五年生の学習	80	A5	1	3	3	210	1
	六年生の学習	80	A5	1	3	3	206	1
	五年生の学習	120	A5	1	3	3	322	4
	六年生の学習	120	A5	1	3	3	330	3
	少年少女ブック	120	B5	1	3	3	224	4
	少年少女ブック	110	B5	1	3	3	218	6
	少年少女ブック	110	B5	1	2	3	218	4
	少年少女ブック	110	B5	1	2	3	238	7
	少年少女ブック	110	B5	1	2	3	183	2
	少年少女ブック	110	B5	1	2	3	228	3
	少年少女ブック	110	B5	2	3	3	216	7
	少年少女ブック	110	B5	1	2	3	238	6
	少年少女ブック	110	B5	1	2	3	190	6
	少年少女ブック	110	B5	1	2	3	224	6
平均	107.9	B5	1.1	2.5	3.0	231.8	4.3	
A. B. C. Dの平均		101.1	B5				148.075	4.43

注 ※・紙質、刷り、装幀は評価
 ・紙質評価は、総体基準による

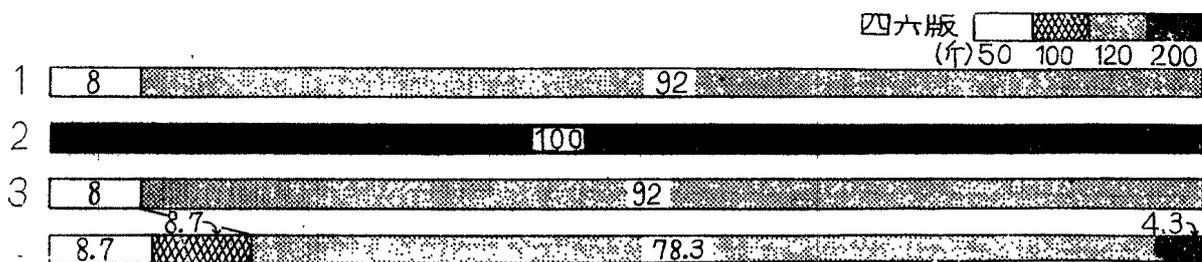
いまの児童雑誌のほとんどがB5版だといってもいいくらいである。第16表に示すように、幼稚園から高学年を通じて同傾向にある。表にもみるとおり、A5版は現在では学習誌の名残りのようにみえる。この大版化の傾向は、その理由を実際にこどもにたずねてみると、「図柄が大きさはっきりする」ということにある。

(D) 紙質の傾向
 ある編集が期待できる、「こどもの眼につきやすい」、「絵や文字がはっきりする」などにあるようだ。

第2図に示すように、低学年ものになるほど紙質がよくなる。

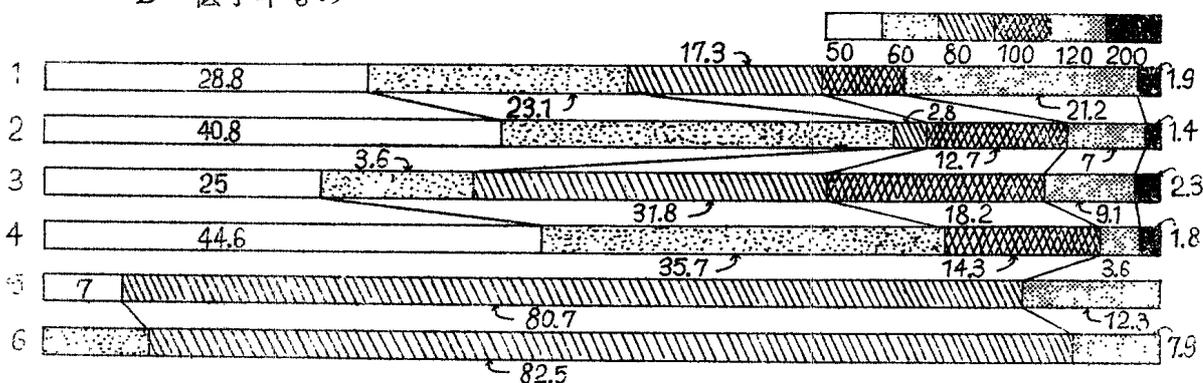
第2図 紙質の割合 (B5判 (斤数のみによる%)

A 幼稚園もの



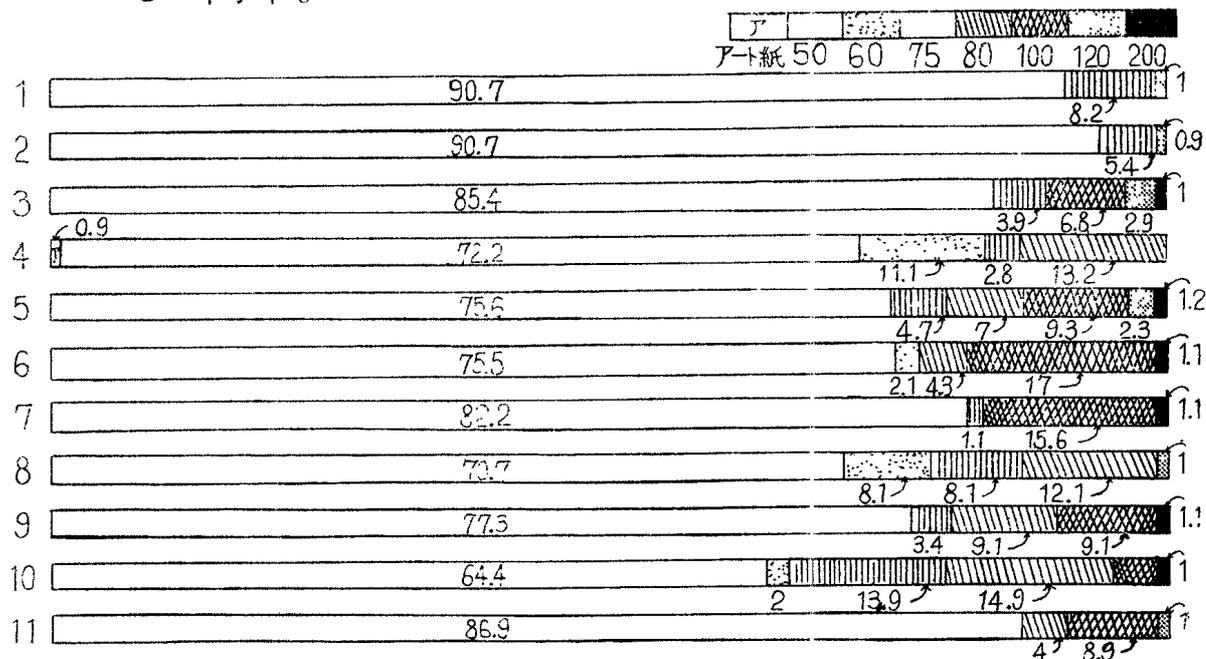
1. 幼稚園 2. よいこ 3. 幼稚園ブック 4. たのしい幼稚園

B 低学年もの



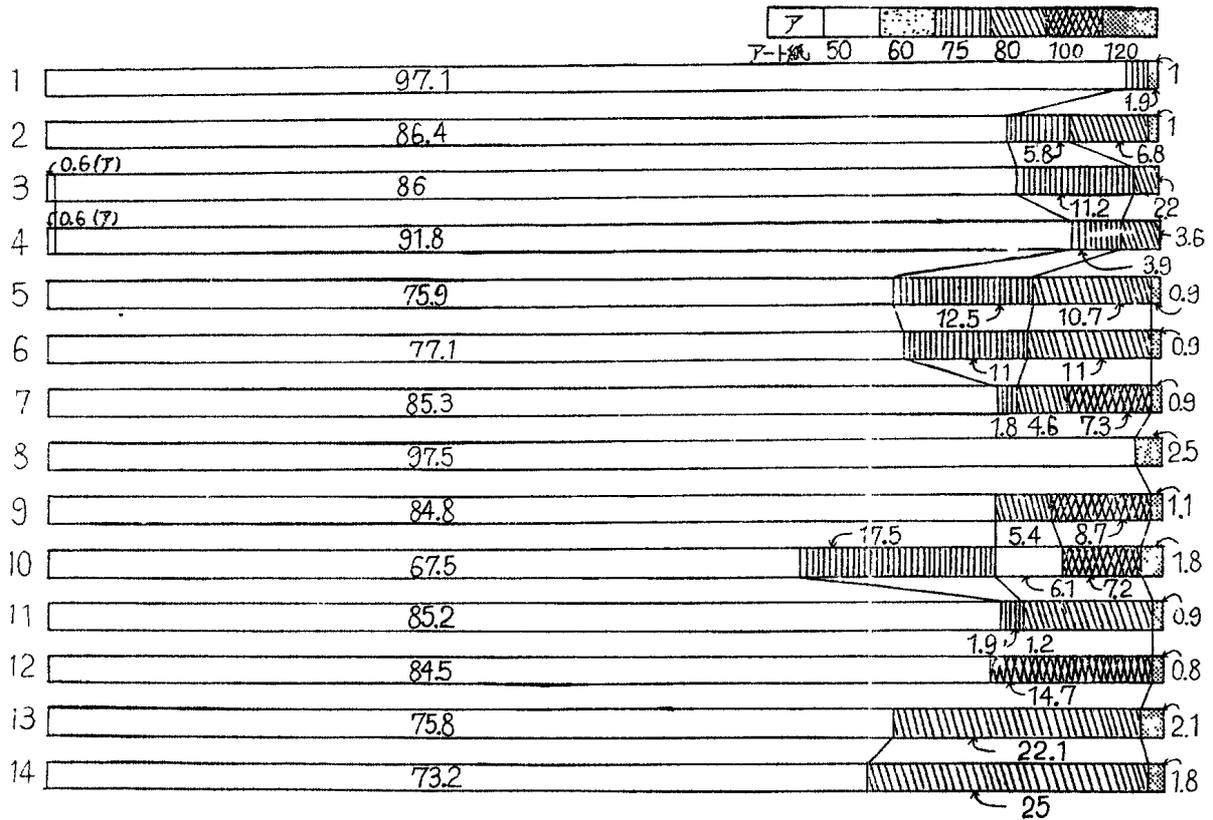
1. 小学一年生 2. 小学二年生 3. たのしい一年生 4. たのしい二年生 5. 一年の学習 6. 二年の学習

C 中学年もの



1. 三年の学習 2. 四年の学習 3. 小学三年生 4. 小学四年生 5. たのしい三年生 6. 幼年ブック
7. 幼年クラブ 8. なかよし 9. ぼくら 10. りぼん 11. 痛快ブック

D 高学年もの



1. 五年の学習 2. 六年の学習 3. 小学五年生 4. 小学六年生 5. 少女ブック 6. 少女クラブ
7. 少年クラブ 8. おもしろブック 9. 野球少年 10. 少女 11. 少年 12. 冒険王 13. 漫画
王 14. 少年画報

(斤数が増す)。特に、幼稚園ものは、絵の刷りを鮮明化する必要上、とびぬけて紙質がいい。全体からみて、低学年ものは中間にあるが、やや幼稚園ものに近い。中・高学年ものの大部分は五〇斤程度の更紙である。見ることより読むことが主になり内容のヴォリュームを増さざるを得ないからである。雑誌グループごとに条件や事情が異なるのであるから、実際の評価に当っては、その枠内で相対的にみていかなければならない。

また、紙質は斤数の軽重とともに、光沢や滑らかさをもふくめて評価されなければならない。さきの表の評価も、そのような立場と以下にあげる基準からなされたものである。

(紙質評価の基準—斤数だけ)

- 「5」：一二〇斤以上が約七〇%以上のもの。
- 「4」：八〇斤が約七〇%以上のもの。
- 「3」：各斤数にわたり平均されているもの。
- 「2」：五〇斤が約五〇%前後で、六〇斤と七〇斤で約二〇%以上のもの。
- 「1」：五〇斤が約七〇%以上のもの。

(注)

これは、このたびの三五種の範囲内の傾向から、世論分析、こどもの調査などを参考にして作製した。実際の評価は、これをもとにして各雑誌グループ内の相対評価をした。

(ハ) ページ数の傾向

さきの一覧表にもみるとおり、高学年になるほどページ数が増すのはいうまでもない。しかし、三〇〇ページ以上のもの

は、少し考えなおさなければならぬのではないか。その点については後にふれる。

幼稚園ものは五〇ページ前後、低学年ものは一〇〇ページ前後、中・高学年は二〇〇〜二五〇ページ前後というのがいまの傾向のようだ。⁽²⁾

(二) 活字の大きさの傾向

幼稚園では一二ポあるいは四号が普通であるが、低学年になるとかえって大きくなり、四号、三号、一八ポなどが多く使われている。小学校一、二年では、専ら文字に親しみをたせ、読字力をつけるための明瞭さが必要になってくるからであろう。幼稚園では、読む興味をもったものには読ませる程度で、絵に重点がおかれるからであろう。

中学年では、一二ポ、一〇ポを主とし、高学年になると、一〇ポ、九ポが大部分を占める。これは、自ら内容の量的増大に対する反比例現象を反映するものであろう。(紙数の都合で図表は略する)

また、各雑誌グループごとに次のような評価基準によってみると、活字の大きさについては、わずかに二、三のものが不適とされるにとどまる。(主要な活字の基準—大きさのみ)

A 幼稚園もの

- 最適：一二ポあるいは四号以上が七〇%以上。
- 不適：一〇ポ以下が約七〇%以上。

B 低学年もの

- 最適：三号あるいは一八ポが約七〇%以上。
- 不適：三号あるいは一八ポが約四五%以上。

- 不適：四号あるいは一二ポ以下が約五〇%以上。
- #### C 中学年もの

- 最適：一二ポあるいは四号が約七〇%以上。
- 適：一〇ポ、一二ポ、四号以上の平均されているもの。
- 不適：一〇ポあるいは五号が約七〇%以上。

D 高学年もの

- 最適：一〇ポ以上約五〇%以上。
- 適：九ポ、一〇ポ、一二ポなどの平均しているもの。
- 不適：九ポ以下が約七〇%以上。

(注)

これは、現実の雑誌の平均や最頻度数を基準にしつつ、雑誌をみたときの全体観、発達段階を考慮して作った。

(例) 値段の傾向

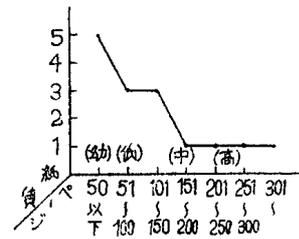
前掲第16表一覧表にみるとおり、ほとんどのものが一〇〇円前後である。幼・低学年ものだからといって、必ずしも安くなっても、紙質や色刷りで質を高めなければならぬからであろう。次にそれらの諸関係についてふれてみよう。

(一) ページ、紙質、値段の関係

紙質の総体評価とページ数との相関を求めると、第3図のようになる。ページ数が増大すれば、紙質が低下するという反比例関係が明白である。

次にページ数と値段との関係をみると、ページの増大につれて値段も高くなるという正比例関係がみられる。ただ、Bグループ

第3図 ページと紙質の関係

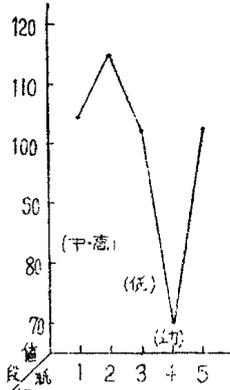
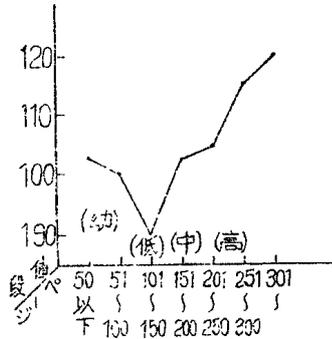


誌の一〇一〜一〇五ページものでは、必ずしもその関係は表われず、陥没状を示す。これは前述のとおり、値段は必ずしもヴォリュームに比例しない。幼・低学年部分の証明となる。それはさらに、第5図の紙質と値段との関係によって裏づけられる。これ

によると、紙質の総体評価が「1」〜「2」の低質の段階では、値段はページ数によって支配されるさきの現象が再びはつきり表われ、値段は紙質に略々反比例している。

これに対し、幼・低学年ものになるにつれて、事情は急転し紙質は

第4図 ページと値段の関係

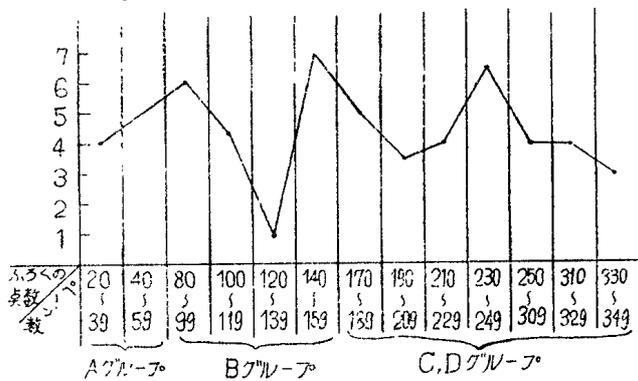


第5図 紙質と値段

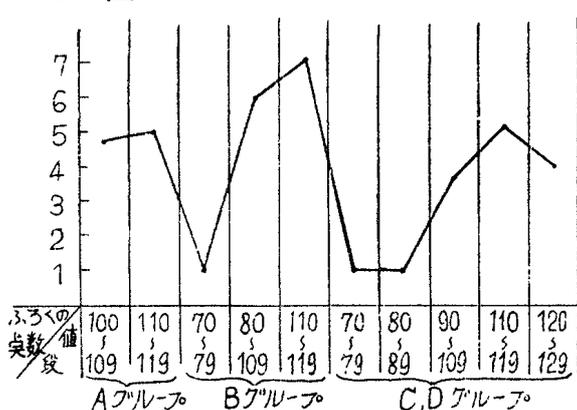
値段の支配条件となる。なお、刷りと装幀については、前掲一覧表の評価傾向をみてもらいたい。(ト) ふろくの傾向

第17表にみるとおり、内容的にみるとふろくの王様は、何といっても漫画で、最高点数を占める。それは、低・中・高学年を通じての共通な傾向である。次が玩具、学習用具の順。ただ、幼稚園

第6図 本文のページ数とふろくの点数



第7図 値段とふろく点数との関係



ものだけは、第一位が絵本で、第二位が玩具。そして、別冊指導のしおりが必ずついている。この点、低学年も同様である。また、第18表の形式からみると、単行本形式のものが圧倒的多数を占める。この大部分が漫画であることはいうまでもない。第二位が紙玩具形式であり、これらの傾向には学年差はない。ただ、二、三の玩具はベニヤ製ピンポン・バットなわとびロープなどで、ややふろくの限界を感じさせるものがある。(イ) ふろくの点数、ページ、値段の関係

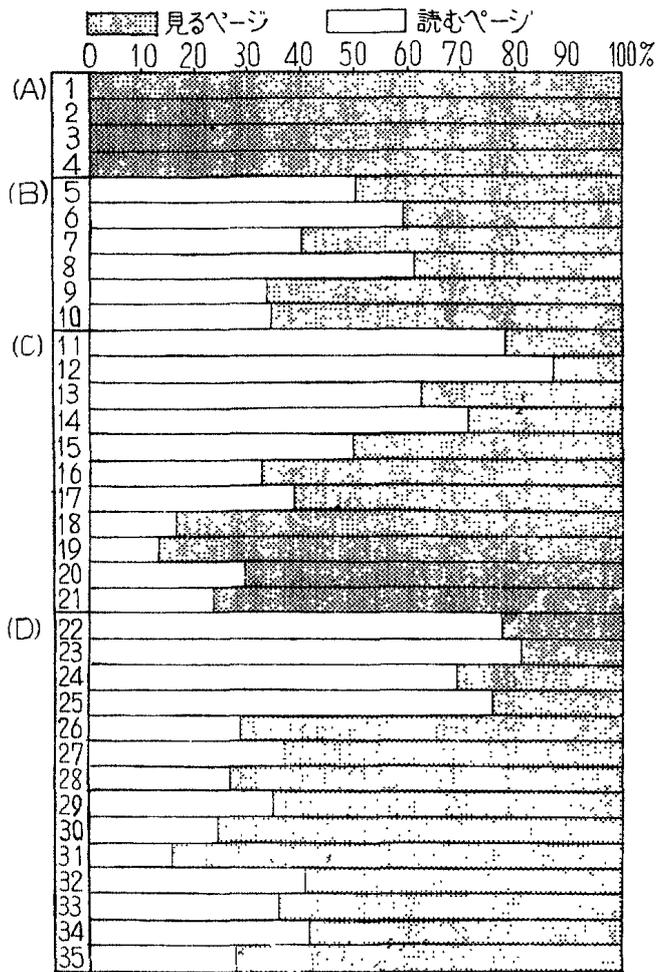
次に第6図でふろくの点数と本文のページ数との関係をみてみよう。これによると、本文のページ数が減少すれば、ふろくの点

第18表 ふろくの形式別度数

グループ	誌名	月	玩具		単行本	テストブック	図鑑	辞典	装飾品	写真ブック	しおり	整理袋	絵本	その他	点数
			紙	紙以外											
A	幼稚園こ	2	3	—	1	—	—	—	—	—	—	—	1	—	5
	幼稚園ブック	2	2	—	1	—	—	—	—	—	—	—	1	—	4
	幼稚園の新しい幼稚園	2	2	—	2	1	—	—	—	—	—	—	—	—	5
	幼稚園	3	2	—	1	1	—	—	—	—	—	—	1	—	5
B	一年生の学習	2	—	—	—	—	1	—	—	—	—	—	—	—	1
	二年生の学習	2	—	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1
	三年生の学習	2	3	—	3	—	—	—	—	—	—	—	—	—	6
	四年生の学習	2	3	—	3	1	—	—	—	—	—	—	—	—	7
	五年生の学習	3	1	—	3	2	—	—	—	—	—	—	—	—	6
	六年生の学習	3	1	—	4	1	—	—	—	—	—	—	—	—	6
C	三年生の学習	2	—	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1
	四年生の学習	2	—	—	—	—	1	—	—	—	—	—	—	—	1
	五年生の学習	3	—	—	3	—	—	—	—	—	—	—	—	—	3
	六年生の学習	2	1	—	1	—	1	1	—	—	—	—	—	—	4
	三年生の学習	3	1	—	3	1	—	—	—	—	—	—	—	—	5
	四年生の学習	2	2	—	5	—	—	—	—	—	—	—	—	—	7
	五年生の学習	2	—	—	5	—	—	—	—	—	—	—	—	—	5
	六年生の学習	3	—	—	5	—	—	—	1	—	—	—	—	—	6
	三年生の学習	3	1	—	4	—	—	—	—	—	—	—	—	1	6
	四年生の学習	2	1	—	3	—	—	—	—	1	—	—	—	—	5
D	五年生の学習	2	—	—	—	1	2	—	—	—	—	—	—	—	1
	六年生の学習	2	—	—	—	1	—	—	—	—	—	—	—	—	1
	少年生の学習	2	1	—	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	4
	少女生の学習	2	—	—	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	3
	少年生の学習	2	—	—	2	1	—	—	—	1	—	—	—	—	4
	少女生の学習	3	—	—	3	—	—	—	—	1	—	—	—	—	6
	少年生の学習	3	1	—	3	—	—	—	—	—	—	—	—	2	4
	少女生の学習	2	1	—	6	—	—	—	—	—	—	—	—	—	7
	少年生の学習	2	—	—	2	—	—	—	—	—	—	—	—	—	2
	少女生の学習	2	—	—	1	—	—	—	—	—	1	1	—	—	3
	少年生の学習	2	1	—	6	—	—	—	—	—	—	—	—	—	7
	少女生の学習	2	—	—	6	—	—	—	—	—	—	—	—	—	6
少年生の学習	2	—	—	6	—	—	—	—	—	—	—	—	—	6	
少女生の学習	2	—	—	6	—	—	—	—	—	—	—	—	—	6	
計			27	2	93	10	7	2	3	1	1	3	3	152	

注 その他:サイン帳, 絵はがき, 国際連合加盟国の旗

第八図 見るページと読むページの割合



1. たのしい幼稚園 2. 幼稚園 3. 幼稚園ブック 4. よろこ
5. 一年の学習 6. 二年の学習 7. たのしい一年生
8. たのしい二年生 9. 小学一年生 10. 小学二年生
11. 三年の学習 12. 四年の学習 13. 小学三年生 14. 小学四年生
15. たのしい三年生 16. ぼくら 17. なかよし
18. 幼年クラブ 19. 痛快ブック 20. りぼん 21. 幼年ブック
22. 五年の学習 23. 六年の学習 24. 小学五年生
25. 小学六年生 26. 少年 27. 少年クラブ 28. 野球少年
29. 少年画報 30. 冒険王 31. 漫画王 32. 少女 33. 少女ブック
35. 少女クラブ 35. おもしろブック

ところで、低学年以上を見渡してみると、学年が進んでも見るページがきわだって減少するということはない。ただ、雑誌グループごとにみたとき、学習誌のほうが娯楽誌より比較的読

数が増すという関係は、ほとんどみられない(最低七点)。
 また、第7図ふろくの点数と雑誌の値段との関係では、全般的に、値段の高くなる原因は必ずしもふろくの影響とはいえない。が、しかし、各学年段階雑誌グループごとにとみると、値段は、明白にふろくの増加を伴うことがわかる。
 (ウ) 内容類型別の割合
 内容類型別にその%を図化してみると、幼稚園ものの大部分は生活絵、観察絵といわれるもの(図表略)。第二位は絵話の類であるが、ものによっては、しつけや学習、あるいは童謡絵を次に強調するものもある。いわゆる絵本形式をとっているといえよ

う。
 低学年では、絵話、漫画、童謡とともに学習が頭をもたげることが、それは対蹠的な二つのものに分れる。本文の学習を相当に絵話、童謡などに娯楽化してしまつて、せまい意味の学習は、れっきとしたふろくの「学習ブック」とするもの。また、教養や学習を相当表むきはつきりねらうものとのちがいがでてくる。
 中・高学年になると、学習誌と娯楽誌はやや性格が分化し、学習誌にはテストを含むやや表だった学習ページが一〜三割ぐらい取り扱われるようになる。しかし、その他の差異はほとんどつかず、絵物語と漫画が、多かれ少なかれ、主な内容としていすわっている。娯楽誌では、それらの%が増しただけのちがいである。
 (エ) 見るページと読むページ
 次に、これらの内容を見るページと読むページに大きく二分してみよう。幼稚園ものはいうまでもなく見るページがほとんどで、絵本形式をとる。

むページが多くなる傾向は明らかである(第8図参照)。娯楽誌が視覚的手段のみこどもを甘やかし、学習誌が固くて読まれないう問題の出されるのも、こんなところから始まるのだろうか。

●内容上の問題点

前述の統計的傾向からも、紙質を落してただただページを増すとか、漫画や絵物語が多すぎるとか、ふろくの点数が多いとか、見るページばかりで、読むページがほとんどないとかいう問題点があがってくる。

さらにここでは、内容の質的側面について、分析の基準や分析票を用いた試案的な分析の結果から二、三の問題点を拾ってみよう。

第一に、作家や編者の児童観のあり方の問題がある。作家や編者は、真にこどもたちのことをどれだけ思い、また、知っているのであるか。まだまだ自己陶醉の感がないでもない。一、二年には不可解なまでの感傷化などによくぶつかる。また、それは、こどもの夢を満足させようとするのかもしれないが、それ自体が作家の生の夢であるにとどまるような抽象画など。もっと慎重な取扱を望まれるものがある。

第二に、中・高学年向きの漫画や絵物語に比較的多くでてくるものとして、取材の質的な方向を変えなければならないようなものにぶつかる。兄弟子の関取の背中を流している弟弟子が、「ついでにオチンチンまで洗いましたよか」といってどやされたり、「パンツと手ねぐいをまちがえた」という頓狂な顔がでてくるな

ど。一体、これ以外に素材がないのだろうか。その取材地盤がまことに幅のないものにぶつかる。

熱血漫画を描くたぐいのものには、佐々木氏も⁽⁵⁾いっほい熱血と正義感、スポーツが、単なるけんか的手段としか描かれていないものもある。久保氏⁽⁶⁾のいうように、「マンガ作家どもには、ひとの感情を大切にしようとか、もののいのちをいとおしむ気持などはみじんもない」とおもわれるようなものが、やはり、極点の問題として存在することは否めないようだ。漫画なども取材に幅がないからこそ、底を流れる動かしがたいユーモアから離れ、言葉だけのひやかしや、くすぐりに終ってしまうのであろう。

第三に、断片的知識の切り売りで、紙面の内容などにまったく無関係な、理由のない「水鳥の羽がぬれないのは……」調の一行知識ものなどの類。これがこどもの生活知識にどれだけ役だつことになるのか疑問がある。

第四に、ファンレターの要求である。作家の住所や電話番号まで大きく書きだして、「お手紙をやって下さい。」と模範文まであげている情緒性と低俗性だけを追うこどもの心理が、こんなところからマスメディアとの間に悪循環を起すとしたら、やはり、問題がでてこよう。

第五に、絵物語と漫画のむやみな接近ということ。くすぐり茶化すなどまったく必要ない筋合いのものを、妙に茶化す点など名作などがそのような視覚化にあうと、原典とはまったく縁もゆかりもない点の強調になる。

第六に、学習ものやふろくなどの問題解決性の不足、非実用性があげられる。また、目的なき、単なる手段としての受験準備主義のゆがみも馬鹿にできない。

第七に、娯楽誌の読者対象の不明確さの禍をあげなければならぬ。「読めるものが探して読む」とか「読書指導に任せる」のでは、無責任もはなはだしい。内容的にみて、どの程度の発達段階のものに読ましたらいいのかが自ら明白でなければならぬ。それは、マカレンコがいうように、「なにについて語るか」というよりも「どのように語るか」という点において、発達段階への明確な配慮が望まれるものがある。

以上述べたいくつかの問題点は、それが現実のすべてを意味しないことはいうまでもない。これらの質的な面の分析には、なおいっそう、その基準と方法の確立をめざさなければならぬ。⁽⁹⁾

(注)

- (1) 細かい分析の視点や分析票については略す。
- (2) ページ数の評価基準については略す。
- (3) 内容の類型分けについては幼・低学年については生活絵、観察絵などの一二類型、中・高学年については一〇類型に分けた。
- (4) 分析評価の基準は、幼・低学年、中・高学年、ごとに内容類型の特殊性に応じて作製した。
一例として、中・高学年向実話、絵物語、物語、小説の評価基準をあげておこう。

- | | | |
|----|--------------|-------|
| 1 | 内容のもつ現実性 | (+、-) |
| 2 | 社会的背景 | (+、-) |
| 3 | 人間性 | (+、-) |
| 4 | 教育性・指導性 | (+、-) |
| 5 | 迫力や盛り上り | (+、-) |
| 6 | 発達段階への適応 | (+、-) |
| 7 | 現実と空想の混同の可能性 | (+、-) |
| 8 | 俗なメロドラマ性 | (+、-) |
| 9 | 過度の刺激性 | (+、-) |
| 10 | 不健全性 | (+、-) |
| 11 | ねらいや意味の不明瞭 | (+、-) |
- (C) 実際の評価に当っては、以上の基準番号を+、-をつけて票基準欄に記入し、段階評価の理由根拠を提示する。この+、-の度合は五段階スケールの上のせていく。
- +、-の意味は、各基準項目ごとに異なる。たとえば、7番以下の反対語めいたものなどについては、それに+、-をつけることによって特殊なニュアンスを打ち出そうとするもの。
- (5) 「カリキュラム」一九五七年五月。
 - (6) 「カリキュラム」一九五五年五月。
 - (7) 牧野巽編「現代社会学」P五九。
 - (8) ア・エス・マカレンコ 児童文学と児童読物(北村、古田など訳) P三二。
 - (9) 児童雑誌の編集・出版体制についても自ら関連的に述べなければならぬが、後の機会にゆずりたい。

五 児童読物の科学について—児童雑誌を中心に

いままであげてきたいくつかのことからは、児童雑誌（あるいは読物）の研究分野や体系のいずれにか位置すべきことがらであった。さて、ここでは、不十分ながら、児童雑誌を中心に、児童雑誌あるいは広く読物の科学なるものについて、その研究分野のやや組織的な考察を提示しておくとしてしよう。⁽¹⁾ 研究分野には、まず次の五つの側面が考えられよう。

- A 与える側を通じての児童雑誌研究**
- a** 出版および編集などの機構、方針、方法ならびに販売傾向などの調査研究。
- b** 編集者や執筆者のアイデア、児童観、教育観、技術などの調査研究。
- c** 父兄、教師およびその他の児童・教育観、読物・雑誌観与え方の研究。
- d** 各分野専門家の協力体制、世論の反映の仕方の研究。
- B 与えられる側を通じての研究**
- a** 児童生徒の読書傾向、経験、習慣、態度の研究。
- b** 児童の精神的（人的）、物的読書環境（時、場、社会階層、父母兄弟）の研究。
- c** 児童の読書心理（興味、能力、要求）などの実験的研究。
- d** 児童生徒の作品研究。
- C 児童雑誌の内容・構造の分析研究⁽²⁾**
- a** 雑誌の構造分析

- (1)** 表紙のさし絵、タイトル。**(2)** 版の大きさ。**(3)** 内容類型ごとのスペースの配分の仕方。**(4)** 全体的な色彩の種類や配合。**(5)** 特集ものの取扱。**(6)** 紙質、印刷、製本、活字の種類大きさ。**(7)** 指導のための頭がきや説明がき。
- b** 小説、絵物語、物語、童話、童謡詩、絵話の内容分析
- (1)** 主題の内容や構想の適否。**(2)** 内容の難易。**(3)** さし絵の構想や描写（個々の色彩や、デッサン、フォームなど）
- c** 漫画の内容分析
- (1)** 漫画のねらい。**(2)** 漫画の誇大化、幻想化、こっけい化。**(3)** 漫画の動物擬人化。**(4)** 漫画の説明語（しゃれ、ユーモア、吹出し）のつけ方、**(5)** 絵の描き方。**(6)** 連載と短篇の特徴。
- d** 学習ものについての内容分析
- (1)** 児童雑誌における教養・学習ものあり方。**(2)** 学習の興味化、娯楽化。**(3)** 学習ものの利用度。
- e** その他
- (1)** 全体を通じて使用されている語句、漢字、かな、文の長さ、文節のもうけ方、文体などについて。**(2)** 外国の児童読物内容との比較研究。**(3)** 児童むき単行本と児童雑誌の性格および機能上の差異の比較。
- D 他の児童文化財との関連研究**
- a** 教科書との関連
- b** こども新聞、ラジオ・テレビこどもの時間、教育映画、パンフレットなど、との機能、性格の差異、特質の比較。

c 他の児童文化財との関連的使用方法。

E 児童雑誌の与える社会的影響効果の研究

a 雑誌からのこどもの「知識の摂取」内容・度合の分析。⁽³⁾

b 児童雑誌による「こどもの行動の変容」度・内容の分析
以上あげたような研究分野の成果は、すべてCの内容・構造の研究をコアとして、その創作過程にはね返ってこなければならぬであろう。そして、また、その重要なたこ入れをなすものは、Bのこどもという読書主体の分析研究と、Eのこどもに与える影響効果の分析研究であろう。

これが、読書指導分野の研究と密接な関連をもたなくてはならないことは、もちろんである。しかし、また、読書指導の研究そのものでないことは、断っておかなければならない。

さて、次に、これらの分野における諸研究は総じて児童雑誌（あるいは広く児童読物）の科学という研究体系、方法論をもたなければならぬ。しかし、それ自体が、いまの段階では経験的帰納的に構成されねばならないともいえよう。筆者自身、いまこれを厳密に述べる自信がないので、児童雑誌（読物）の科学なるものが、その基礎学としてもたなければならぬいくつかの科学部門にふれておくとしよう。

いままでの多くの児童読物が、児童文学者と画家の独占といってもよいものであったが、今後はもっと広汎な、しかも掘り下げたいくつかの基礎学が役だてられなければならないであろう。児童文学や美術は、いまもその中核的な座にあるのはもちろんのこと何といっても、まずこどもを理解することにおいて、心

理学、児童心理学、読書心理学が必要な方法論の成立に役だてられねばならない。さらに、読物の流行の問題、回し読みの読書グループ、宣伝の社会的効果の問題などには社会心理学が、貸本屋の分布と利用率、読者層の基盤の分析、父兄の職業やそのこどもの読書に関する意識、配慮の問題などには、読書社会学、社会学などが役だつてであろう。

その教育的な配慮において教育・哲学・心理・社会学が、私的公共的にこどもに読物を与え得る財的基盤の分析、読物の価格の問題に関して社会経済学がサーヴスするであろう。

ところで、さきの各節の研究傾向や、研究分野を見渡してみると、この児童雑誌（あるいは広く読物の問題）が、いかに社会的な問題であり、それなるがゆえにまた、社会学的、教育社会学的アプローチを必要としているかが察せられるであろう。

(注)

(1) 児童読物調査研究会編「児童読物の研究」1、拙稿参照。

(2) 児童読物の内容・構造の分析研究については、なお、大きく、文、絵、文字の研究などに分けて考察することができよう。

(3) 牧野巽編「現代社会学」P五〇参照。

なお、この児童雑誌のもつ社会的影響効果の実験的分析などに関しては、まことに不可能に近いほどの難関が存し、被験者のモルモット化の限界をどうするかというような重大問題もはらまれている。
(東京都立教育研究所)